
ジャン・ジェン・トゥエル物語

篠原 ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャン・ジエン・トゥエル物語

【Nコード】

N8261E

【作者名】

篠原 ひなた

【あらすじ】

ジャン・ジエン・トゥエルは、どこにでもいるような少年だった。魔法使いや大賢者でなければ、その弟子でもない。ただの少年だった。

- 謝辞

読まなければ、生きていられないと思っていた。
書かなければ、生きていられないと思っていた。
そんな僕に。

世界の広さを教えてくれた君へ。

I・はじまりの物語

ジャン・ジェン・トゥエルは、どこにでもいるような少年の１人だった。

どちらかといえば小柄な彼は、瞳の色も髪の色も、村中にありふれて珍しくもなんともないような栗色で、際立った特徴といえるのはメガネをかけていることくらい。

そのメガネだって、黒縁で瓶底で、からかいの対象にすらならないような地味なやつだった。

彼は、外で遊ぶことをまったくしない子どもだった。

同年の子どもは、村にたくさんいたけれど、友だちと呼べるような存在はいなかったんじゃないかと思う。

それは単に、学校から帰りつく頃には日が暮れてしまう村はずれの、むしろ隣町のほうが近いくらいの場所に彼の家があったからで、他の子どもたちに彼が嫌われていたとかそういうわけではなかった。ただ……、彼の立ち位置はとにかく曖昧だったからうまく言葉が見つからないけれど……うん、そうだ。こう言うのが一番ぴたりくるかもしれない。

彼はなんとなく孤立していた。

それはたぶん、周囲の大人を心配させてしまうほどには明確だったんだろう。

安息日の前のお休みだとか、学校がお昼までしかない日の朝だとかに、彼の母であるミズ・リーシャは言ったものだった。

お友だちとお家で遊んでもいいのよ

だけど、ジャン・ジェン・トゥエルが、家に誰か、ミズ・リーシ

ヤのいうところの友だちを呼んだことは一度だってなかったんだ。

……彼のことばかりしか書き連ねていないこの話が、退屈だったら申し訳ない。とにかく、彼について説明しきってしまわなければ何一つ物語りようがない気がするんだ。だからもう少しの間だけ、ジャン・ジェン・トゥエル少年の話におつきあい願いたい。

ジャン・ジェン・トゥエルは、人間に興味を持たない子どもだった。

というと、大げさに聴こえるかもしれないが、同じくらいの年頃の村の子どもたちと友情を交わす必要性を彼が感じていなかったのは確かだ。

だって、彼はそこにいてもそこにいなかった……回りくどい書き方はもうやめることにしよう。

ジャン・ジェン・トゥエルは、目を覚ましている時間のほとんどを、本を読んで過ごしていた。

本だって？ そんな高価なものをちっぽけな村の子どもが好きなだけ読めるなんてこと、あるはずないじゃないか、と君は思つかもしれない。

確かに、その通りだ。

ジャン・ジェン・トゥエルが生まれ育ったのは、冬になると男手のほとんどが出稼ぎに行くような、ごくありふれた農村だった。

街ではありふれていたガス灯だって、一つも立っていない。電報だって、ジャン・ジェン・トゥエルが6つの時によやくうてるようになったくらいだ。学校の教科書でさえ、兄弟や親戚のお古を使っている子が何人もいた。

でも、トゥエル家には本があった。ミズ・リーシャの父であり、ジャン・ジェン・トゥエル少年の祖父である、故ジェン・ダール・トゥエル氏が集めた本が。

故ジェン・ダール・トゥエル氏は、若かった頃に街の学校で教師をしていた。学校が休みの日には、授業料が高すぎて学校に通えない子どもたちのための私塾を開いていたほど、教育熱心な人だったらしい。そんな彼の実用を兼ねた趣味が、本の収集だった。当時発明されたばかりの活版印刷という手法で大量に印刷された妖精の物語から、自ら書き写したらしい啓蒙書に至るまで、貸し本屋が開けるほど多くはないけれど、村のごくありふれた家庭としては珍しいほどの量の本があった。

そして、生まれてから3年ほど、病弱で陽の光に当たることすら医者に止められていたジャン・ジェン・トゥエルは、父が街に働きに出、母が家事をしている間、年金で隠居生活を送っていた今は亡き祖父に、それらの本を読み聞かせてもらって育ったのだった。

自分が座っていた小さな椅子と、広げられた大きな本、それから文字を指差すしわだらけの指先と、おだやかな声の響きを、彼は忘れたことはない。

けれど、そんな日々は長くは続かなかった。

ジャン・ダール・トゥエル氏は、当時にしてみれば珍しいほど長命な人だったけれど、それでも、ジャン・ジェン・トゥエルが4つの時に天に召されることとなった。

その日以来、ジャン・ジェン・トゥエルは一人で本を読むようになったのだった。と言っても、難しい言葉はまだ読めなかったから、貴族が読むような専門的な本ではなく、冒険小説や御伽噺を中心に、といっても、個人の収集物には限界がある。

その上、貸本屋もない小さな村のことだから、すぐにジャン・ジェン・トゥエルが読めるような本はなくなってしまった。

それからだ。

ジャン・ジェン・トゥエルが自分で物語を書きはじめたのは。

遠い国の魔女の話、虹の根元にある宝物の話、空の果てに浮かぶ海の話。

書くことは、読むことに似て、とても面白かったし、空想はどこ

までも自由だった。

だから、ジャン・ジェン・トゥエルはいつだって幸せだったんだ。そこに文字があつて、それが物語を作っているならば。

とはいっても、紙はパンを焼くための窯の使用料と同じくらい高かったから、ジャン・ジェン・トゥエルの“落書き”がゆるされるはずもなかった。

だから、彼がはじめて綴った物語は残っていない。家の裏の大地に木ぎれで書いただけの文字は、次の雨の日に洗い流されて消えてしまった。

つたないながらも、何日もかけて大切に作ったものが壊れたときに誰もが感じるような、かなしみとも怒りとも悔しさとも寂しさがいりまじったようなあの感覚に、ジャン・ジェン・トゥエルもまた支配された。何日も何日も、それこそパンもろくにのどをとおらないほど落ちこんで、彼は熱を出した。

もともと、体が丈夫とはいいがたいのに、ろくに食べなかったのでは、熱の一つや二つ出しますよ。

滋養のあるものさえとれば、数日のうちに治るでしょう。

村の医師と教師を兼ねているブラウン神父が、心配するあまり倒れそうになっていたミズ・リーシャに励ますように告げるのを、ジャン・ジェン・トゥエルは熱に浮かされた頭で聞いていた。

高熱のあまり苦しさをとりこしてしまったのか、ベッドの枕元で続く会話も、窓の外でうなる風の音も、ミズ・リーシャの声も、何もかもがふわふわとつかみどころがない幻のように感じられた。聴こえるものも、見えるものも、感じるものも曖昧だった。

にもかかわらず、ジャン・ジェン・トゥエルの頭の中ではめまぐるしく色んな考えが渦巻いていた。かつてないほどはつきりとした思考の渦に翻弄されながら夢うつつをさまよう中で、彼はいつしか

今まで読んだ本の中身を思い浮かべていた。

特に記憶力に優れていたわけでもない彼は、その瞬間にびっくりするような経験をすることになる。

一つひとつの物語が、城を抜け出して大冒険を繰り広げる王女がその直前に階段の25段目でくしゃみをした、というような特に印象的でもない場面でさえ欠けることなく、活版印刷のあの特徴的でいながら同じ形の活字に飛び乗って、彼の身体を駆けめぐっていたのだ。

ジャン・ジエン・トゥエルは、驚きを二の次にして、ただただ文字を追った。その文字が創りあげる物語を読むことは、自分の力では重くて動かせない身体で何かをするよりよっぽど楽しかったからだ。

そうして、ふと気づいたその瞬間に、彼は重厚なオーク材でできた扉の前に立っていた。

あたりは白いもやに包まれていて、いったいどこに来てしまったのかも分からない。

不思議と、恐怖はなかった。

そうするのが当たり前のような気分で、ジャン・ジエン・トゥエルは扉を押し開けた。

はじめに目に飛び込んできたのは、本だった。

次に目に飛び込んできたのも、本だった。

本、本、本・・・

見渡す限りどこまでも、本の山は続いていた。

ジャン・ジエン・トゥエルは狂喜した。

もう、ここがどこだろうとどうだってよかった。

だって、目の前には本があって、自分はそれを読むことができるのだから。

それからずっと、ジャン・ジエン・トゥエルはそこで本を読んで

いた。

今まで読んだ本すべてをもう一度読み終わってしまうと、後には真っ白なページだけが広がる本の山が残った。

白い紙！　どれほどそれにあこがれたことだろう！！

彼は、どこからともなく現れた羽ペンで、その白い本に物語を綴りはじめた。

読んで、書いて、また読んで・・・そうこうするうちに、ジャン・ジェン・トゥエルは本の中に入りこめるようになった。

魔女の弟子になって牛を月に連れて行ったり、うさぎになって虹を追いかけたり、鷹に乗って空を駆ける小人族の王子になったり。

物語の中を縦横無尽に駆けめぐるのは、ただ文字を目で追うよりずっと楽しかった。

時たま、ミズ・リーシャに抱き起こされるようにして口から流し込まれる甘い糖蜜ミルクや、タマゴのスープが、彼をベッドに、つまり重い身体の中に引き戻したけれど。それも長くは続かなかった。だって、ジャン・ジェン・トゥエルは扉の中に書きかけの物語とたくさん冒険を残して戻ってきたのだから。

結局、熱が下がるまでの3日間のほとんどを、彼は扉の中で過ごしたのだった。

熱が下がった頃には、彼は自由自在に扉の中と外を行き来できるようになっていた。

もちろん、身体は身体で動かしておきながら、だ。

食事をするときも、家の手伝いをしているときも、ベッドの中で寝るときだって、彼は扉の中にいた。学校へ行くようになってからも、それは変わらなかった。

ジャン・ジェン・トゥエルが、目を覚ましている時間のほとんどを本を読んで過ごしていた、というのは、つまりそういうことだ。

彼には、彼がこれまで読んできたすべての物語と、紡いできたす

べての物語をおさめた、書庫があつたんだ。
彼以外の誰もたどりつけはしない書庫が。

長々と書き連ねてしまつて、申し訳なかつた。

けれど、何度書き直してもこれ以上うまく書けなかつた。

とにかく、これでジャン・ジェン・トウエルとその書庫について
の冗長な説明はおしまい。

この先何がおきたのか、それはおいおい綴つていくことにしよう。
ここまで読んでくれた君に、最大の感謝を。

ⅠⅠ・ブラウン神父と学校のこと。

ジャン・ジエン・トゥエルは、5つになった頃から学校に通っていた。学校といっても村の中にある分校だったから、教師は村のブラウン神父が兼ねていて、校舎は村の中心にある教会の聖堂だった。農作業があまり忙しくない時期の昼間は5歳から10歳くらいまでの子どもたちが、夜には文字を覚えたい大人たちが、そして安息日の次の日の主日には全員が教会に通っていた。つまり、村の誰もが7日に1回は教会に通っていたということになる。

ブラウン神父は、町にある程度近いとはいえまぎれもなく農村でしかないあの村にはそぐわないほど、教育熱心で先進的な人だった。ジャン・ジエン・トゥエルが生まれる20年ほど前に聖都の大学を主席で卒業したものの、その革新的な考えが批判されて地方に飛ばされた、と聞いたことがある。それが本当なのかどうなのかは分からないし、ここで語る必要もないだろう。とにかく、ブラウン神父は村の人々に慕われていた。それは確かな話だ。

「この50年で、世界は大きな変化を遂げました」

秘蹟の中で、説諭の中で、授業の中で、ブラウン神父は、事あるごとに説かれたものだった。大きな変化とは、雷石が精製できるようになって以来、聖都でなされた多くの発明と、それによって変化した生活のことを言っておられたのだと思う。伝令使の代わりに伝話が、辻馬車の代わりに汽車が、つまり“キカイ”が生活に入り込み出してきたのがちょうどその頃だった。

「これから先の10年で、われらは思いもよらなかった世界の扉をくぐることになるでしょう。」

そのときに、神の子としてよりよく在れるように、今学んでおき

なさい」

その言葉は、決して形だけでは終わらなかった。

年に何度か視察にくる聖都の学校関係者の驚嘆の声を、何度か聞いたことがある。研究者としての義務とはいえ、片田舎にやってくることになったことを例外なく嘆いていた彼らは、授業に立ち会った瞬間に例外なく言葉を失うことになった。ブラウン神父が村人に伝えようとしていたのは、それほど高度な内容であった、ということだ。

それもそのはずだった。辺鄙な村の粗末な学校で教えられていたのは、聖都に近い大きな街の学校でもそこの公立では教わりきることが難しいような、文法や弁証法や修辞学の三学と算数や幾何や音楽や天文学の四科を合わせた七自由科にはじまり、本来なら大学でなければ学べないような神学や法学や医学の初歩や正式な文書に使われるルーザ語の読み解き方、更には聖都の教育アカデミーの学会で発表されて間もない発明やキカイの原理に至るまで、まるで聖都の役人登用の試験に挑戦するものが学ぶような内容だったからだ。多くの村では、識字率が50%をきっていた時代においてどれだけ特異なことだったのか、理解していただけるだろう。当時の聖職者の中には、キカイを異端視する人々が多かったにも関わらず、ブラウン神父が教えていたのはその最新の理論だった。

実際問題、それだけの科目を教えるというのは、たいしたことだった。

ブラウン神父一人で教えきれるようなものではなかったから、年上の生徒が年下の生徒に教えるというような助教法もよく行われていたし、それは村の人々にとっても歓迎できることだった。だってそうだろう？ 教えることで人は学んだことを復習するものだし、その内容だって生活を豊かにするに足るものだった・・・どんな肥料を畑にまけば去年より麦が多く収穫できるか意見の交換ができる

ようになつたり、商人との取引で文字が読めなくて騙されるなんてこともなくなつた。

村の人々がブラウン神父をとて慕つて頼りにしていたのは、“学校”で教わつた知識に助けられた経験が大なり小なりあつたからかもしれない。だから、小さな村にしては本当に、ありえないくらい珍しいことにほとんど全ての子ども、つまり女の子も学校へ通うことが当たり前になつていた。それがどれだけ珍しいことなのか、誰も気づかなかつたくらいに。

ジャン・ジェン・トゥエルも例外ではなく、毎日のように教会に通つて硬い長椅子に座つてブラウン神父の講義を受ける日々を送つていた。と言っても、彼が真面目に学校に通つていた、と述べるつもりはない。彼はむしろ、とても不真面目な生徒のうちの一人だつた。学校に通うようになってから与えられたノートの半分以上を埋めていたのはルーザ語の綴りや算術の式などではなくて細かい文字でびつしりと書かれた物語だつたし、そもそも学校にいる間のほとんどを彼は書庫の中で過ごしていたのだから。

また書庫のことか、と思うかもしれない。退屈させてしまつていたら申し訳ないけれど、これだけは書いておかなければ、と思つたんだ。うん、この次。この次から、ジャン・ジェン・トゥエルの物語は動きはじめる。本当は、生まれたときからずっと続いているのに、動きはじめるなんていうのはおかしく感じるだろうか。それでも多分、この書き方が一番近いんじゃないかと思う。

この冗長な物語を最後まで読んでくれたことに、最大限の感謝を。

II・ブラウン神父と学校のこと。（後書き）

読みたいという強い気持ちをもってこの物語を読んでくださったあなた、たまたま見つけて読んでくださったあなた、もう二度と読む気にはなれないと思われたあなたに。

そこにいてくださってありがとうございます。

あなたがそこで生きていらっしゃること、この物語を読んでくださったことをとても嬉しく思っています。

この物語は、僕が書きたいという強い思いをもって書いている物語です。伝えたいと思っていることを伝えたくて紡ぐ物語です。

もしよろしければ、最後までお付き合いいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8261e/>

ジャン・ジェン・トゥエル物語

2010年10月11日03時04分発行